

〈講演〉

歴史に見る 発展のための経済知の意義（II）

The Significance of Economic Knowledge for Development in History (II)

ベルトラム・シェフォールト
原田哲史・若松直幸 訳

The meaning of “economic knowledge” should be mentioned in four phenomena: (1) controversies of the European Monetary Union, (2) monetary history, monetary policy and monetary thought in the 19th century, (3) economic controversies in the period of the Reformation, and (4) the usury debate. We find Max Weber’s formulation of western economic “spirit” of the early modern period questionable.

Bertram Schefold

JEL : B10, B20, B30

キーワード：経済学史、経済思想史、経済知、社会的市場経済、経済学史研究会

Keywords : history of economic thought, economic knowledge, Social Market Economy, kgshet

2019年12月7日（土）本学図書館ホールで開催された経済学史研究会第250回記念例会における2つの記念報告のうちのひとつ、ドイツ・フランクフルト大学（ゲーテ大学）経済学部上級教授ベルトラム・シェフォールト（Bertram Schefold）氏による“The Significance of Economic Knowledge for Development in History”の邦訳である。本誌において2分割で掲載されており、(I)は第74巻第2号、53-67頁にされ、今回はその(II)である。(I)の最初のページで注記したように、邦訳に際しては、講演後のシェフォールト氏との意見交換による修正を取り入れたとともに、英語版（講演）の元になるドイツ語版を参考にした。なお、脚注は（本文中の原注を除き）訳者によるものであり、[]も訳者による補注である。ただし、参考文献の初版出版年の[]での記載は、シェフォールトによる。

4. 経済知の意味を示す歴史的な実例

4.1 欧州通貨統合

欧州通貨統合の制度化で大きな過誤が生じたことについては、専門家の間にとどまらず幅広い意見の一致が見られる。ヨーロッパの各地域で経済発展の潜在力は大きく異なっており、ユーロが導入されて以来、それぞれの地域では為替レートの変更による埋め合わせはもはやできなくなった。格差は経済成長にともなって拡大する傾向にあり、それを打ち消すことのできる〔国内の〕強力な中央官庁は存在しない。それぞれの国民国家がかろうじて格差を是正する手段としては、再分配、差別化された課税、さらにインフラや教育支出の移転や配分ぐらいいしかない。マーストリヒト条約はオールド自由主義の諸原則によるのであるが、それは、個々の国の財政赤字を覆い隠すなかで、それらの国に——規制があるとはいえ——開かれた競合関係のなかで発展する責任が負われる、という意味でのことである。競争力のない国では、調整可能な為替レートが存在しないため、通貨の切り下げの代わりに内的減価が行われねばならない。これは生産力が後退している国では賃金と物価を下げなければならないことを意味しており、ユーロベースの生産費は平均的な費用水準に比べて低くしなければならない。しかし、そもそも後進的な国々にはそのための政治力がなく、しばしばその意志も欠けているのである。そのため、EU の南部諸国の多くの経済学者および政治家たちは、他の諸原理でもってオールド自由主義の概念に反対している。彼らは需要増加のため政府支出増加によって活動水準を引き上げるべきだとする。この拡張政策による成長は、オークンの法則のとおり、さらに内需拡大の結果、雇用だけでなく生産力の状況も改善され、成長がまた一人当たりの生産量を増加させ、技術進歩を加速させるということになるはずだ、とされる。いずれにせよ、様々なセオリーが様々な専門家たちによって担われつつ——政治的諸党派や欧州中央銀行といった諸制度の内部・相互において——影響力を競い合っているのが、現状である。

4.2 19世紀の金融史、金融政策、金融思想

経済理論と経済政策が絡み合って諸制度の生成にも影響を及ぼした有名で見事な例は、19世紀イギリスの金融教育と金融政策でもって示される。ナポレオン戦争はインフレを引き起こしたが、通貨の失墜には至らなかった。その代わり、イギリスは犠牲を払って金本位制に復帰し、戦争中に大幅に増加した公債は何十年にもわたる努力で返済された。通貨学派は、戦時中のインフレは実質成長を上回る貨幣流通量の増加によって引き起こされたと考えていた。彼らは金とイングランド銀行券を貨幣と見なした。いわゆるピールの銀行条例により、1844年以降、紙幣発行はイングランド銀行に委ねられ、一定量の無担保紙幣を除き、紙幣は金価値の裏付けにもとづいて発行された。こうしてインフレ傾向は実際に抑制されたが、19世紀イギリスで10年毎の驚くべき頻度で発生した経済危機の中で、イングランド銀行は流動性の低い銀行を何度も支援した。これには貨幣流通量の増加を必要としたが、それは救済活動の間、一時的な銀行条例の停止によってのみなされた。これに対して銀行学派は、生産拡大と物価の上昇傾向は不作などの外生的要因に依存しており、その結果として生じる流通手段に対する需要増大は金や紙幣だけでは満たされず、手形や民間銀行の紙幣など貨幣代替手段によって達成された、とした。貨幣流通量は現代的表現を使えば内生的と見なされた。こうした観点からすれば、危機の際には、必要であればイングランド銀行の支援を受けて、イギリス国内の銀行が相互に支援し合わなければならないのは当然のことと思われた。ピールの銀行条例は、不必要だけでなく、危険であると見なされた (Rieter 1971)。このようにして、異なる様々な結論が導き出された。イングランド銀行は「最後の貸し手」となった (Bagehot 1996 [1873]; Schefold 2017, pp. 147-156)。

4.3 宗教改革期の経済論争

様々な経済思想が現実の発展に及ぼす影響については、さらにさかのぼることができる。16世紀はドイツが力強い経済成長を遂げた時期であり、それは交易経路が変化した時期に、とくに30年戦争が始まった時期に終了した。ザクセン公国は早くも15世紀に王家の諸事情で分割され、一方で宗教改革時に

カトリックに留まったアルベルト家の統治があったが、他方で新しい信仰を採用しただけでなく、ルターとその布教を支えるうえで決定的に重要な役割を果たしたエルネスト家の統治があった。しかし、銀鉱山と鑄造の支配権は分割されなかったため、両公国は通貨統合によって結ばれていた。今日私たちが知っているように、通貨統合は不安定な性格をもつものである。エルネスト家のザクセン選帝侯ヨハンはプロテスタント側を支持したため、多額の出費を強いられた。彼は鑄貨価値の引き下げ、すなわち鑄貨の減価をしたかったが、それは多くの貨幣を自分の財宝として引き寄せるためであった。このことは、経済政策と経済理論のヴィジョンの見られる印刷物の応酬にもとづく議論を——われわれが知る限り世界史上初めて——世間に巻き起こした。のちの経済理論の言葉遣いはまったくと言っていいほど無く、経済はまだ社会生活の独立した次元として見られていなかったが——いずれにせよそれは名前をもたなかったが——その機能についてはすでに議論されていた。1 世紀後、西欧の重商主義者たち、中央ヨーロッパの官房学者たちは、経済発展の現象を理解するために新たな概念を模索し始めた。これは、前述したように、新たな意味づけの発展として説明されてきた (Krauth 1984)。

鑄貨制度の論争に関する [当時の] 文書類はあるのだが、それとて、まったく視覚的・直感的なものであった。アルベルト公が擁護したのは、定まった割合の貨幣鑄造税 [鑄造費用と額面価値の差額] でもって鑄造された銀貨を保有すること、すなわち、ヨーロッパ全域に見られたそうした方法で銀貨を保有することであった。というのも、臣民たちの経済的な豊かさが見えなかったからであろう。とはいえ、数多くの城や要塞といった建造物を作る活発な動きにおいて、素晴らしい新たな絵画において、言い換えるなら、今日われわれが文化としてのルネサンスと呼ぶものと、経済の諸事象としての成長と呼ぶものとのすべての事柄において、豊かさが見て取れなかったというのか？ 銀貨の製造は、ポルトガル王との貿易を通じて得られたイギリス製の美しい衣服やインドの胡椒などの快適な諸商品の入手を容易にしなかったというのだろうか？ それらとともに神の意志にかなう秩序が強固になることは確証できず、そうだとすると神の意志にかなった秩序は労働・取引を通じた営利活動の基礎

ではなかったことになる、ということだったのか？ 減価した鑄貨が高い物価と借手・貸手関係の不公平とに至ることが、すぐには認識されなかったということであろうか？ これに対して、プロテスタントのエルネスト公は小冊子のなかで「過剰鑄造」——素晴らしい言葉——は避けるべきであると主張したのであって、多すぎる鑄貨が流通しないのであれば物価上昇は観測されない、としたのである。そうして彼は、含有価値の低い支払い手段によって貨幣を流通させるという考え方を、先取りしていた。減価した貨幣は外国に流出する傾向が少ないから、不必要な奢侈品の輸入を防ぐだろう。彼は外国勢力、とくにイギリス、ヴェニス、そしてポルトガル王に対して、取るに足りない商品を輸出してザクセンの銀とザクセンの富を引き寄せようとしていると非難した。したがって、重商主義学説がどこかでしっかり定式化される前に、エルネスト公は重商主義の第一の原理を、すなわち国内で多くの貨幣を流通させるためには輸出超過によって他国の貴金属を獲得する必要があるという原理を、説明していたのである。銀の輸出は商品の輸入につながり、それは人々から雇用機会を奪い、農民や職人を窮地に追いやることになる。したがって、減価によって局所的な自律的發展および単純素朴な〔神に喜ばれる〕生活形態への復帰がもたらされることが見込まれたのであって、それは神の意志なのであった。それゆえに、彼はここにおいて、銀という単一商品の輸出による一面的な輸出依存には問題があることを認識していた。なお、このルター派の君主エルネストは、ヴェーバーがピューリタンについて言う初期の近代的蓄積の提唱者だったのではなく、領主に保護される単純素朴な農民・職人による小規模経済の提唱者だったのである。

4.4 高利貸論争

ヨーロッパで何千年にもわたって続いてきた利子や高利貸に関する論争こそ、私が思うに、最も重要な例なのである。驚くべきことである。その議論は枝分かれし、しばしば繰り返され、時には非常に洗練された。簡単に要約すると、ユダヤ人は同じ部族の人々から利子を取ることを禁じていたが、よそ者から利子を取ることは許されていた。ギリシャ人の間では、プラトンもアリスト

テレスも利子には反対であった。無料で提供された貸付金が期限内に返済されない場合、プラトンは例外を認めた。アリストテレスは論理的な議論を展開した。彼は貨幣の機能を交換手段と定義した。したがって、それは富のための蓄積の対象となつてはならない。彼は取得に関して自然的〔生活維持の〕形態と貨殖的形態とを区別した。後者は、より多くの貨幣を手に入れることを目的とした貨幣の取得を意味した。自然的取得は、家計を維持するという限られた目標を持っていた。富に関しては、あらゆるものと同じように中間が保たれるべきであった。富は良い生活を送るための手段だった。ほとんど何もたない貧しい人は良い生活をおくることが妨げられるけれども、哲学的な意味での良い生活をというなら、豊かな人は豊かな人で、富について不必要なことにまで気を遣わなければならないので、良い生活は妨げられるのである。貨幣はその場合、交換を容易にするためにあるのであった。それを自分の利益のために蓄積する人は誰でも、無限に人道に反する富を求めて奮闘し、貨幣を財宝にしてしまい、それが交換に投げられる本来の目的から遠ざけてしまった。貨幣と交換、すなわち贈与取引や商品取引に対する彼の複雑な諸考察の文脈において、利子の取得は貨殖的活動の頂点として現れたが、それは貨幣がそれ自体から貨幣を生み出すように思われたからである。とはいえ、その増殖の源は何だと考えられていたのか？ そういう具合に、高利貸は「当然のごとく嫌われ」、自然に反する不条理なものとして非難されたのである (Schefold 2015 [1994])。

トマスは、高利貸批判を正当化するアリストテレスの議論をさらに厳密にした (Aquinas 1968, quaestio 78)。彼は、パンのように消費で使い果たされる財と、賃貸住宅のように破壊されずに使用可能な財とを区別した。パンのように使い果たされる財は、必要性が生じたとき相互に貸し与えられるものであり、その恩義は等価物が返されたときに取り消される。持続的に使用可能な財は長期的に貸し出され、貸手はそれに対する補償を受け取る。なぜなら、借手はその商品を賃貸された住宅のように使用できるからである。トマスは貨幣の貸付を、交換行為において使い果たされる財の使用と解釈する。というのも、それはもう一方に与えられるからである。貨幣はそれを所有している人によって使い果たされるべき財であった。もし貸付の返却が元々貸し与えられた金額

の総額を上回っていたならば、その利益・利子是不公正かつ不条理なものと思われたのである。すなわち、それは事柄の本質に反するのであった。

市民社会は、ある限度内での利子を——多くの罪深い行為のように——許容することができたが、キリスト教徒である人間は隣人を愛さなければならないため、利子を放棄しなければならなかった。それゆえに、キリスト教徒の商人は、罪の告白時に自らが利子を取得していることを公言し、もしまだ可能であれば、それを返すか、教会に任せなければならなかった。このことは、『エル・ナバロ』（1998 [1556]）とも呼ばれる有名なスコラ哲学者アズビリクエタによる聖職者のための便覧で、強調されている。高利貸批判は、こうして教会の収入源となったのである。トマスにはもうひとつ問題の議論があったのであり、それは、貸付が必要であっても、これまで利子付きで貸し出したことのない人に利子を受け取らせてそれをしてもらうのは、プロの貸付業者に再度それをさせるよりも罪深いという議論である。しかも、その理由は、プロはもう罪を犯しているからいいのだということであった。そうしたプロはとくにユダヤ人であったから、こうしてユダヤ人のアウトサイダーとしての役割が確定されてしまったのである。

さて、特別な事情において利子を正当化する必要が生じた。ローマ法学者たちの書物には次の3つの主要な議論が見られ、今度はそれらが深く論じられた。利子が正当化されるのは、[ラテン語で表された] “^{ダムヌム エメルゲンズ}damnum emergens”（危急の損害）、“^{ルクルム ケッサンス}lucrum cessans”（失われてしまった利益）、“^{ペリクルム ソルティス}periculum sortis”（運の悪い危険、リスク）の場合であった。これらでもって正当化しようとした試みの数々を見ていったとき、歴史的な意味を学ぶ過程へと至るのである（Gordon 1975）。これらのうち “^{ダムヌム エメルゲンズ}damnum emergens” は、貸手が損失を被る場合——たとえば友人間の貸付が契約どおりに返済されない場合——貸手は補償を要求できる、ということの意味する。また “^{ペリクルム ソルティス}periculum sortis” は、リスクについて表明しておくことである。特別なリスクが生じる際に補償を要求するという考え方は、初期の保険事業の構想へとつながった。ただし、これらは複雑で見定めにくい。というのも、リスクというものが認識できるのは最後の最後だったからである。とはいえ、リスクをめぐるスコラ哲学の議論

は保険制度や確率論が分かっていくための準備として役立ったことは、示すことができる。それなしには、近代ヨーロッパのそうした発展はほとんど不可能であっただろう (Bernstein 1996)。これに様々な資金調達手段の総体としての発展が付随していったのであり、それは商業手形から始まり、次々と出される新しい金融商品へと続いていった (Goetzmann 2017)。

むつかしいのは“^{ルクルム ケッサンス} lucrum cessans”の議論、つまり失われてしまった利益についてであった¹⁾。問題は、お金を貸し付ける人は誰でも、そのお金を自分自身のある事業に使うこともできたはずで、そこから自分自身の利益を得ることができたはずだった、と主張することができるかどうかであった。トマスは、想像上の取得可能性というものは現実には存在しないことが多いと反論し、どんな場合でもまだ手に入れていないものを販売すべきではないと主張した (Aquinas 1968, quaestio 78, ad primum)。アズピリクエタは、銀行家のように営業していた両替商の場合との関連で、問題をより厳密に示した。両替商はそれなりに有用であってそれ自体では罪にはならないが、強欲により法外な対価を要求するならば罪となる、としたのである。人々はなお、農民の自然な農業活動は自己保存のためではあるが、単に世俗の良い生活を得ようとするものではなく、キリスト教的な救済に至るものである、と考えていた。取得のそうした限界 [この伝統的な農業経営の場合のような基準] は、両替商たちには、自分たちが危険にさらされている限り、視界に入らなかった。しかし、今度は彼らが銀行家としても営業し、利子を要求して、“^{ルクルム ケッサンス} lucrum cessans”を根拠として利子取得を弁護するとき、人々は、彼らの [貸付の結果としての] 貨幣所有を見るならば、彼らが——貸出を行ったということで——実際に通常の事業を失ってしまったのかどうかを知ることができる。もし彼らがなお現金をもっていれば、彼らは引き続き両替業務を行えるのであり、その限りにおいて貸付は損失につながっていない。そうしてアズピリクエタによれば、両替商が銀行家として暴利をむさぼってはいないと言えるのは、両替商の懐にお金がないときなのである²⁾。

1) Cf. Gordon 1975, pp. 195-204, 村井訳、142-148 頁。

2) この一文は、英語版にはないが、ドイツ語版 (S. 28) から補足した。

* [原注] しばしば理解されていないのは、現代の状況においても人はいつも ^{ルクルム ケッサンス}“*lucrum cessans*” 関係を引き合いに出すことができることである。というのも、自分は A さんではなく B さんに貸すことができるということからしてそうであり、いずれにせよ、自分はいつでも銀行にお金を預けて利子を得ることができるということからしてもそうなのである。こうしたことは、すべての時代を通じていつもそうだったわけではない。さらに重要なのは、B さんに貸すことは A さんに貸すことと同様に疑わしいということである。問題は自分が本当の投資機会なるものをもっているのかどうかであるが、それはなかなか明白ではないのである。

われわれが高利貸の蔑視から利子の承認にまで至る隠れた歴史を知るようになってから、まだわずか数十年しかたっていない。トマスの一代ほどあとのフランシスコ会修道士で鉢鉢修道士のピエール・ジャン・オリヴィは³⁾、アッシジの聖フランチェスコによる清貧の諸原則を厳格に守り、このため教会と対立したが、すでに 13 世紀にレッシウスの後期スコラ哲学のような議論を先取りしており、資本として使われるものとして貨幣に生産的な機能をあてがった資本概念を定式化した (Olivi 2012, D63)。彼の定式のひとつは次のとおりである。「所有者が強く意識して狙う推定利益は、貨幣・財そのものの属性のみならず、それを超えた特別の利益豊穡な属性なのであり、通常それをわれわれは資本と呼ぶ。したがって、単なるその価値のみならず、それに付加された価値も戻されなければならない⁴⁾。利益豊穡な属性を意味する [ラテン語の] 表現 ^{ラティオ セミナリス ルクリ}“*ratio seminalis lucri*” は、ストア派の ^{ロゴス スベルマティコス}“*logos spermatikos*” [種子たる理性] を想起させるが、その考え方はオリヴィの ^{イムベトゥス}“*impetus*” [躍動] についての自然科学論と関連しているとされる (Wolff 1994)。投げられた石が ^{イムベトゥス}“*impetus*” なるもの (現代語の “impulse” [衝撃] と類似) をもつと同じく、資本は剰余価値——オリヴィの言う ^{ヴァロール スーベルアディウンクトゥス}“*valor superadiunctus*” ——への躍動をもつ。マルクスだけでなくバーム＝バヴェルクのような新古典派経済学者たちも、資本概念を生産的に捉えるべきだとして批判することになるが、オリヴィにおいてそれは大きく前進していたのである。ただ中世世界の静的な性格は、労働のみ

3) ただし厳密には、それぞれの生没年はトマス・アクィナスが 1225(-27)～74 年、P. J. オリヴィが 1248 頃～98 年である。岩波書店編集部編『岩波 世界人名大辞典』岩波書店、2013 年、第 1 分冊、517 頁；第 2 分冊、1886 頁、参照。

4) 原文ではラテン語の原文とその英訳とが記されているが、訳者は、後者の日本語訳を、ドイツ語版でのドイツ語訳 (S. 29) をも参照して行なった。

による生活必需品の生産だけを目的としていたのであって、それは超克されることになるのであるが。

5. 近世の経済精神

このようにして、トマスからレッシウス (1999 [1605]) までのおよそ 400 年の間に経済理論の端緒が生成してきたのであり、その際、資本の蓄積というものが正当で有用なものと思なされ始めた。この移行が困難をとまなうものであったことは、フィレンツェのサンマルコ修道院で一室をもっていたコジモ・デ・メディチの例により説明される。彼は、聖なる東方三博士を表すベノツォ・ゴッツォリの絵画を飾ってこの修道院を尊んだ。幼子イエスの足元に高価な贈り物を置くことによって、富裕層に救済の道筋が開かれていることが示された。コジモの同時代人であるフィレンツェの聖アントニヌス⁵⁾、初めに修道院長、やがてフィレンツェ大司教となった人物であり、正義に関する壮大な理論についての著者であった。その理論では、トスカナの様々な経済部門が各職業の活動の神学的評価とともに描かれており、それは当時影響力をもっていた銀行についての記述もある。彼はオリヴィを読んでいたと思われる。アントニヌスは銀行家たちを許容した。というのも、アントニヌスは、彼らの事業の中心は貸付ではなく、異なる所在地間の貨幣の取引だと考えたからである。この機能は生産的であると考えられたのである。もしこの事業が隠れた貸付と結びつき、価格に利子の要素が含まれるならば、これが小さな罪と思なされる可能性はある。とはいえアントニヌスは、それはアリストテレスの論じた生活必需品の充足を目的とした仕事という意味における自然的取得ではないから、フィレンツェの富裕層は例えば公的な祝祭を支援し、また市の人々が祝宴で分かち合えるように宮殿の外苑で結婚の式典を祝うなどして共同体のために働くのがよいであろう、と提言していた (Poettinger and Schefold 2013, Schefold 2018)。

ヴェルナー・ゾンバルトとマックス・ヴェーバーは「資本家精神」につ

5) 生没年は、コジモ・デ・メディチが 1389～1464 年、フィレンツェのアントニヌスが 1389～1459 年である。『岩波 世界人名大辞典』第 1 分冊、158 頁；第 2 分冊、2871 頁、参照。

いて論じ合うことになる。ゾンバルトはそれが——例えばフランダースにも似たものが同時に存在していたが——イタリアで生じたと確信していた。他方、ヴェーバーは少なくとも「近代」資本主義の精神は後になって生まれたと考えていた。この問題は、事業それ自体の現れを見て考えるのが良いであろう。資本家精神が息づくような新しい考え・新しい習慣が混在して文書に見られるなら、われわれはそれを経済思想の初期の形と見なすことができるからである。トデスキーニ（2004）のような著者たちはオリヴィ（1900, 2012）と経済倫理とに言及する。オリヴィはプロヴァンスから来てフィレンツェでしばらく教えていた。彼は躍動の理論を用いて合法的な利子取得の範囲を拡大した。経済史家で、後にキリスト教民主党的イタリア人政治家として有名になったアミントレ・ファンファーニは、資本主義とカトリックそれぞれの経済倫理の間には避けられない緊張があり、両者間の妥協が必要とされたことを示そうとした（Schefold 2011）。逆に、オスカー・ヌッキオは、『イタリア経済思想史』の全7巻のなかで（Nuccio 2008 に1冊でまとめられている）、教会ではなく人文主義者たちに焦点を当てた。彼はイタリアの都市の市民精神は商人たちの活動にもとづいており、事業に対する自由主義的な態度は新興のブルジョワが独立を獲得しようとする欲求から発展したと主張する。コジモ・ペロッタ（2004）は、イタリアの人文主義者たちが古代の経済思想に呪縛されたままだったとする議論に反対している。つまり、彼らが成長のプロセスを真に理解していなかったし、ほとんど認識していなかったのだ、といった議論には、反対するのである。マックス・ヴェーバーの学説にしたがうとすれば、これらの著者は共通して、「近代」資本主義のもつ特異性を分析することなしにイタリア諸都市における初期資本主義と「近代」資本主義の連続性を安易に推測してしまっていることになる（Schefold 2017）。ヴェーバーは初期資本主義とあとの資本主義との間の形態的な相違を強調し、かつこれをカルヴァン主義の諸形態こそが進化を誘発したという彼の仮説に結びつけて言うのであるが、必ずしも前者を後者に結びつける必要はないはずである。資本主義を利潤の発生と同一視するならば、その差異は消滅するのである。しかし、もしも工業化・賃労働の蔓延・経営された企業、その他メカニズムや制度などとの関連を言うのであれば、近

代資本主義の方が特異なのである。それらは、古典派の経済思想にはあるが、中世後期の経済思想には見られないのだから。

中世後期での経済学の端緒をどう解釈するかは、依然として論争的であり、近代化への移行の考察から生じる諸問題は簡単に解明できるものではない。その道筋の重要性は、異なる文化を比較することによってのみ理解されるのではないか。中国では、政府高官たちは商人たちが経済に欠かせない存在であることを認識していたが、国家試験の受験資格や官職を得る権利を商人たちから奪うことによって彼らの権力掌握を阻んでいた。もし皇帝だけが重要な経済的意思決定を下せるなら、中央からの官僚的手段が発展を安定させるとはいえ、個人の自発性が優位に立って資本蓄積によって推進される自立的成長過程をとまなう経済への突破口は開かれなかった。そこで、重要な企業の資金調達や国家の資金調達は契約金利による貸付が望まれたのであり、もうひとつの事柄として、近代租税国家の出現と国家信用の成長という構図があったのである (Reinhard 2017)。西欧では、経済知の変化による利子をめぐる論争を経験したあと、さらに契約、企業の設立、とくに信用創造のための法制度の創設を通じて、対応する諸制度が確立されなければならなかった。近代的な資本主義が広がり始めた時期について儒教的経済倫理による禁止事項にのみ依拠して説明し、中国の相対的後進性を説明する際にこの側面を、すなわちそうした経済知の成長という側面を無視するのだとすれば、ヴェーバーは間違っていたのである。われわれが理解すべきなのは、こうした倫理・経済知・経済実践がイデオロギーを超えてどのように結びついていたかということである。それは、様々な革命的な出来事が生起するとともに中国の経済思想が西洋の思想と歩み寄り始めたときに、爆発的に生じていた。ヨーロッパの発展の特異性は、おそらく利子の禁止を決してあきらめなかったイスラム圏と対比すれば一層はっきりしている。慈善事業などの特別な諸制度においては、子どもたちや孤児の生存を確保するために利潤の共有の可能性が生まれたが、にもかかわらず資本蓄積の自由は制限された。現代のイスラム金融は、ムハマンドによる高利貸禁止を放棄することなく、伝統的なイスラムの諸規制を維持して、それを実践上重要な新しい制度と結合できるだろうか、それは観察していくしかない。

中国人は利子を禁止しなかったが、その支払いを規制した。革命前の中国の法定利率は高かった。債務者が支払わなかった場合、債権者は彼を法廷に連れて行き、彼を殴打することができた。もし「娘たち」が「母親たち」よりも背が高くなるならば——もし未払金が元の負債を上回るならば——債権者もまた彼が資金を回収できなかつたために罰を受ける危険がある（Jamieson 1921）。そのようになってしまった場合はヨーロッパでも憂慮すべきと見なされるだろう。17世紀には5パーセントの法定利率が存在したが、未払い利子に複利を要求することは禁じられていた。ライプニッツ（2000, pp. 98-213）は次のように述べることでこの禁止について説明し、擁護した。すなわち、債務者は信頼を身につけ、債権者は定期的な支払いを要求することで彼らを教育すべきであり、そうすれば債権者は支払われた利子を使って他の人にさらに貸付を行うことができる、と。もし債権者が複利を要求することが許されていたならば、彼らはじつと座って、努力せずに自分たちの債権がいかに増加したかを見て、そのための機が熟していると思われたときに債務者の財産を差し押さえ続けることができるだろう。こうした帰結を避けるのが民法の意味であった。中国人も同様に、刑法によって債務関係を整理しようとした。

民法の発展は、経済的諸関係への理解が深まったあとになされた。われわれの例にしたがえば、ドイツではいまだ複利は原則として違法であるが、例えば預金に複利を支払う銀行など、あらゆる例外が認められている。中国の刑法は、近代化への接合がゆっくりなされたのである。

6. むすび

ここでもう結論を述べるとすれば、あえて主張するが、ヨーロッパがすべてではない。利子禁止という脈絡にある迷信が、多くを左右してきた。ヨーロッパの経済発展は——もっぱらというわけではないが本質的に——この論争に負うところが大きいのである。というのも、経済理論の始まりは、スコラ哲学の著者たちの手であったからである。彼らは、まず利子の禁止を全面的に支持することを望み、それから利子規制を緩和し、信用取引の正当化を説明する理由を探し始めた。これらについての様々な思考が取り上げられ、変形させら

れて、古典派経済学者たちの手に入っていったのであるが、古典派経済学者たちはそうした様々な思考を重商主義の理論的諸要素と結合していたのである。しかも、商人たちが実践から知りえた限りで、そうしていた。これがどのようになされていったかを詳細に説明するのはここでは不可能ではあるが、われわれは例を挙げてきた。産業革命が可能となるためには、技術知・実践・理論が一致しなければならなかったのとほとんど同じように、商人たちの経験にもとづく知識と、教会を代表する者たちの鋭い分析とは、結合されねばならなかった。この結合こそ、中間段階としてのフランス重農主義を経たうえで古典派経済学へと至ったものであり、結果として、アダム・スミスの著作も一般的な経済知にもとづいて自由主義を確立することができたとし、体系的に政治的諸改革を行うための枠組みを提供することになったのである。

参考文献

- Aquinas, Thomas: *Sancti Thomae Aquinatis Ordinis Praedicatorum Summa Theologiae III, Secunda secundae*, cura fratrum eiusdem Ordinis. Madrid: Biblioteca de autores cristianos 1968. 稲垣良典他訳『神学大全』第3部、創文社、1997-2012年。
- Arrow, Kenneth; Hahn Frank H.: *General Competitive Analysis*. San Francisco: Holden-Day 1971. 福岡正夫・川又邦雄訳『一般均衡分析』岩波書店、1976年。
- Azpilcueta, Martin de: *Comentario Resolutorio de Cambios*, 1556, Reprint in *Verbindung mit Luis Ortiz: Memorial del Contador Luis Ortiz a Felipe II*, 1558, *Klassiker der Nationalökonomie*, mit einem Kommentarband hrsg. v. Bertram Schefold. Düsseldorf: Wirtschaft und Finanzen 1998.
- Bagehot, Walter: *Lombard Street*. Düsseldorf: Wirtschaft und Finanzen 1996 [1873]. *Klassiker der Nationalökonomie*. 久保恵美子訳『ロンバード街——金融市場の解説』日経BPクラシックス、2011年。
- Bernstein, Peter L.: *Against the Gods. The Remarkable Story of Risk*. New York: Wiley 1996. 青山護訳『リスク——神々への反逆』日本経済新聞出版、1998年。

- Deutsche Bundesbank: Monatsbericht: Die Rolle von Bank, Nichtbanken und Zentralbank im Geldschöpfungsprozess. *Monatsbericht*, April 2017, 69. Jg. Nr. 4, 15-36.
- Caspari, Volker; Schefold, Bertram: *Wohin steuert die ökonomische Wissenschaft?* Frankfurt: Campus 2011.
- Debreu, Gérard: *Theory of Value*. New York: Wiley 1959. 丸山徹訳『価値の理論——経済均衡の公理的分析』東洋経済新報社、1977年。
- Eucken, Walter: *Die Grundlagen der Nationalökonomie*. Jena: Gustav Fischer 1940. 大泉行雄訳『国民経済学の基礎』勁草書房、1958年。
- Eucken, Walter: *Grundsätze der Wirtschaftspolitik*. Bern: Francke 1952. 大野忠男訳『経済政策原理』勁草書房、1967年。
- Goetzmann, William N.: *Money Changes Everything. How Finance Made Civilization Possible*. Princeton: University Press 2017.
- Goldstone, Jack A.: The Rise of the West - or Not? A Revision to Socio-economic History. In: *Sociological Theory*, 18, pp. 175-194, 2000.
- Gordon, Barry: *Economic Analysis before Adam Smith*. London: Barnes & Noble 1975. 村井明彦訳『古代・中世経済学史』晃洋書房、2018年。
- Jamieson, G.: *Chinese Family and Commercial Law*. Shanghai: Kelly and Walsh 1921.
- Keynes, John Maynard: *The General Theory of Employment, Interest and Money*. London: Macmillan 1967 [1936]. 塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』（=『ケインズ全集』第7巻）、東洋経済新報社、1983年。
- Klock, Kaspar: *Tractatus juridico-politico-polemico-historicus De Aerario, ...*. Mit einer Einleitung hg. v. Bertram Schefold [pp. V*-CXIII* vorn im ersten Teilband]. Hildesheim 2009. Reprint der Originalausgabe von 1651 in 2 Teilbänden. *Historia Scientiarum* (Wirtschaftswissenschaften). Ein Editionsprogramm der Fritz Thyssen Stiftung zur Geschichte der Wissenschaften in Deutschland.
- Krauth, Wolf-Hagen: *Wirtschaftsstruktur und Semantik. Wissenschaftliche Studien zum wirtschaftlichen Denken in Deutschland zwischen dem 13. und 17. Jahrhundert*. Berlin: Duncker & Humblot 1984.
- Leibniz, Gottfried Wilhelm: *Hauptschriften zur Versicherungs- und Finanzmathematik*, hrsg. von Eberhard Knobloch und J.-Matthias Graf von der Schulenburg. Berlin: Akademie Verlag 2000.
- Lessius, Leonardus: *De iustitia e iure caeterisque virtutibus cardinalibus libri IV*. Faksimile der Ausgabe 1605. *Klassiker der Nationalökonomie*. Mit einem

- Kommentarband hrsg. v. Bertram Schefold. Düsseldorf: Wirtschaft und Finanzen 1999.
- Marx, Karl: *Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie*. Erster Band. Berlin: Dietz 1969 [1867]. マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳『資本論』第 1 巻、第 1・第 2 分冊、大月書店、1968 年。
- Mokyr, Joel: *A Culture of Growth. The Origins of Modern Economy*. Princeton: University Press 2017.
- Nuccio, Oscar: *La storia del pensiero economico italiano, come storia della genesi dello spirito capitalistico*. Roma: Luiss University Press 2008.
- Olivi, Pietro di Giovanni: *Usure, compere e vendite. La scienza economica del XII secolo*, a cura di Amleto Spicciani, Paolo Vian e Giancarlo Andenna. Milano: Europia 1990.
- Olivi, Pierre de Jean: *Traité des contrats*, édition de Sylvain Piron. Paris: Les belles lettres 2012.
- Perrotta, Cosimo: *Consumption as an Investment: I. The fear of goods from Hesiod to Adam Smith*. London: Routledge 2004.
- Plumpe, Werner: *Ökonomisches Denken und wirtschaftliche Entwicklung. Zum Zusammenhang von Wirtschaftsgeschichte und historischer Semantik der Ökonomie*. In: *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte* 2009/I, S. 27-52.
- Poettinger, Monika; Schefold, Bertram: *Il pensiero economico nel tardo Medioevo ed all'inizio dell'Età moderna*. In: Edizione per la mostra *I Medici - Uomini, potere e passione*, a cura di Alfried Wiczorek, Gaëlle Rosendahl e Donatella Lippi, Curt-Engelhorn-Stiftung für die Reiss-Engelhorn-Museen Mannheim und Verlag Schnell + Steiner Regensburg 2013, pp. 65-77.
- Poni, Carlo: *The Worlds of Work. Formal Knowledge and Practical Abilities in Diderot's Encyclopédie*. In: *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte* 2009/I, S. 135-150.
- Reich, Jens: *Seignorage. On the Revenue from the Creation of Money*. Heidelberg: Springer 2017.
- Reinhard, Wolfgang: *Staatsmacht und Staatskredit. Kulturelle Tradition und politische Moderne*. Heidelberg: Winter 2017.
- Rieter, Heinz: *Die gegenwärtige Inflationstheorie und ihre Ansätze im Werk von Thomas Tooke*. Berlin: de Gruyter 1971.
- Schefold, Bertram: *Amintore Fanfani e le tesi di Max Weber*. In: *Amintore Fanfani: formazione culturale, identità e responsabilità politica*, a cura

- di Alberto Cova e Claudio Besana, *Bollettino dell' archivio per la storia del movimento sociale cattolico in Italia*, n. 1-2, Milano: Vita e Pensiero / Pubblicazioni dell'Università Cattolica del Sacro Cuore, 2011, pp. 111-123.
- Schefold, Bertram: *Wirtschaftsstile Teil 2: Studien zur ökonomischen Theorie und der Zukunft der Technik*. Reprint der 1. Auflage von 1995. Frankfurt am Main: Fischer 2014 (238 pp.).
- Schefold, Bertram: *Wirtschaftsstile Teil 1: Studien zum Verhältnis von Ökonomie und Kultur*. Reprint der 1. Auflage von 1994. Frankfurt am Main: Fischer 2015 (260 pp.).
- Schefold, Bertram: *Great Economic Thinkers from Antiquity to the Historical School. Translations from the Series Klassiker der Nationalökonomie*. Routledge Studies in the History of Economics 178. London, New York: Routledge 2016c.
- Schefold, Bertram: Goethe's economics: between cameralism and liberalism. In: Philipp R. Roessner (ed.), *Economic Growth and the Origins of Modern Political Economy*. London: Routledge 2016d, pp. 79-100.
- Schefold, Bertram: *Great Economic Thinkers from the Classics to the Moderns. Translations from the Series Klassiker der Nationalökonomie*. Routledge Studies in the History of Economics 190. London, New York: Routledge 2017.
- Schefold, Bertram: Thomas von Aquin, Petrus Johannes Olivi und Antoninus von Florenz. Mittelalterliche Kapitalkritik und die Weberthese. In: *Historisches Jahrbuch* 138, 2018, pp. 92-118.
- Seppel, Marten; Tribe, Keith (eds.): *Cameralism in Practice. State Administration and Economy in Early Modern Europe*, Woodbridge: The Boydell Press 2017.
- Sieferle, Rolf Peter: *Der unterirdische Wald. Energiekrise und industrielle Revolution. Die Sozialverträglichkeit von Energiesystemen*, hrsg. v. Klaus Michael Meyer-Abich, Bertram Schefold und Carl Friedrich von Weizsäcker, Bd. 2. München: Beck 1982.
- Todeschini, Giacomo: *Ricchezza francescana. Della povertà volontaria alla società di mercato*. Bologna: Il Mulino 2004.
- Wolff, Michael: Mehrwert und Impetus bei Petrus Johannis Olivi. In: *Sozialer Wandel im Mittelalter*, hrsg. v. Jürgen Miethke und Klaus Schreiner. Sigmaringen: Thorbecke 1994, pp. 413-423.